

『征清戦袍餘滴』(二)

——山岡金蔵中尉の日清戦争従軍日誌——

井ヶ田 良 治
山 岡 高 志

はし が き

I 緒 言

II 明治二十七年日誌

十月二十一日

十月二十二日～十二月四日

十二月五日～十二月晦日

III 明治二十八年日誌

(以上 七十五号)

(本号)

(以下 次号)

なりき

此日中端谷の進士金用梯訪問し来る

十月二十三日 白馬山出發、義州府へ至る、行程三里半、白馬山城は白馬山にある城名なり、此山は凸兀したる急峻山にして之を越ゆるに只一条の坂路あり、全く壁立せる岩石羊腸路にして、上り十五丁、下り十七町、高さ三百間もありと云ふ、城は山腹より頂上あり、城内人家五六十戸にして頂上に寺院的のものあり、此山に上れば鴨緑江を眼下に瞰制し、地形の雄偉なる真に清国を脚下に見下し得べし、現に九連城及虎山近傍の支那兵の旗の樹立せるを見る

海東第一関と大書しあるは義州府の南門なり、来薰門より入城す、戸数四千、家屋大半瓦葺にして市街道路

(承前)

十月二十二日 白馬山城滞在

此日第十二中隊の兵卒火を失し一家を焼失す、彈薬屋を焼きたる為、大に銃声を發し敵襲かと疑はしめし程

幅狭けれども繁華を想像せしむる丈け櫛比す、家屋は先づ日本士族家敷風にして門戸を設け中々嚴重なり、府使は日本語を解すと云

鴨緑江は中二町より一里に涉り浅所にて高一丈位の深さあり、徒渉し難しと云、二俣に分れ其中洲に大島あり

立見少将に面会す、同少将の住宅は白リンスを以て四壁天井を張り込め、実に目を驚かす計りの美観なり、同少将より日本酒の饗を受けつつある際、黒田少将来話あり、依て辞去す、同少将の談話に余は釜山より随行せしが、途中米なく粟により生命を繋ぎしなどの困難談あり

十月二十四日 義州滞在

第十二聯隊の少尉庄司都盛来訪す、平壤の苦戦談あり

黒田甲子郎来る、同人は東京日々新聞記者となり、立見少将に従ひ居るものにて、同人曰く、

平壤の戦闘は野津第五師団長の計劃通りとは往かざりし、初め第五師団長は十五日を以て攻撃すと定め、十四日夜に至り俄に十六日と変更せられしも、大島立見両隊とも已に敵に接触するのみなら

ず、糧食の関係もありて、其の都合通りにならず、依て十五日に断然攻勢を取る事となれり云々

大同江方面は非常の苦戦なりしも、敵は逆襲に転ぜざりしと立見旅団の敵の左側に逼りし為、遂に都合克勝利を博するに至りしなり云々

鴨緑江右岸の敵状は正面約十里に亘り其兵力四万もありと称す、お祭りの如く旗を高地上に樹立し、毎夕軍樂を奏し軍容を張れり、愈明日は攻撃に着手す、委細は黒田に托したり

第五旅団は前衛

共に 九連城の

第十旅団(立見隊)

正面に当る

第十八聯隊の一大隊半は水口鎮にて本日より開戦す

第九旅団(大島隊)は安東縣に向ふ

右に付、明早朝は渡河し大戦となるならん、茲ぞ命の捧げ所なり、功の立て所なりと一同勇み申候

山縣軍司令官は本日義州に着せらる

砲兵四十八門は鴨緑江の左岸に陣地を占領する筈、砲声殷々たる事と存候

第六旅団(金沢の兵)は目下安州にあり、第二軍の第一師団の三分の一去る十日大孤山附近に上

陸せし由なり

国会は一億五千万円の軍費を可決せりとの事

辰次郎も参り面会致候

只今俄に用事出来に付茲に閣筆す

謹啓九月十四日及九月三十日付の御書面拜見仕候、愈御安靜被為遊奉恐悦候、私義も漸く目的通り義州に到着、昨朝は鴨緑江に於て正面戦に加り候、何卒為国家一助とも相成度乍願に勇み居申候、一快戦の上自然勝利にて無事に候はば更に御報可申上候、茲一両日も我軍人の本務に御座候

久邇宮殿下へ宜敷御執奏之儀御取計被下度候

十月二十四日 朝鮮義州府にて開戦準備中

金蔵

父上様

十月三十日夜 安東縣に於て発信

十月二十五日晴

昨二十四日手紙を認め、一は愈御暇乞と思ひ、筆を執りつつある際、大隊長より急に呼びに参りたり、直ちに到れば、即刻より義州府より上流にて鴨緑江を渡るべき点及工兵隊より舟を受取り今夜の九時までに渡舟の用意を終れと命ぜられたり、是も凶上にて(二十万

分一匁)にて此辺位にては如何やと示されたれど現地の様子は一尙不案内なり

余は命を承けたれど時刻は廻り地形は知らず、敵には暴露する故夕刻ならでは舟を出す能はず、何処に此舟あるやも分らず、逆に角何とかなるであると拝辞して中隊に帰り、先づ偵察と決し、中山と申す兵卒と外一名の水泳の上達者を撰拔し、其輕装して直ちに來るべきを命じつつ行李を納め偵察に出来けたり、先は北門を出て前哨線に至りて敵状を聞き、それより敵方に進む為めに鴨緑江岸に下り、中州に至るまで二回の徒渉をなし、潜行して最も西方山麓に流るる本流沿岸まで匍匐しつつ至れり、敵は虎山の東北高地には点々我を制下し、亦山麓には巡視兵らしきもの徘徊するも歩哨は見えず、遂に近付きて四百米まで至り、河水を恐る恐る偵察して急歩帰還せり、此場所は恰も義州府よりは一里半も離り、河水の分流点の下流約三百米にてありし、此地へは如何して往くべきやとの観念は起れり、中山と申す兵卒は志州の漁夫なり、曰く、彼地に至るには前哨線を出でて鴨緑江岸に下り、中州の一本松と敵方の最高点との一直線上にあらんと、余は之に力を得て之を实地に照らし誤らざる事を知り、二人の

兵卒に堅く之を信ずべきを命ぜり

午後六時に一旦義州に帰り復命し、直に出戦準備をなし、従軍武藤安次郎を率ひ大隊長の許に至りしに、一人の兵を道案内に残置し呉れとの事にて、前の中山と云ふ兵を嚮導たらしめ、余は従卒と他の一名を率ひて鴨緑江岸に出て渡舟の所在を尋ぬ、第五師団工兵隊は舟の準備をなしあるとの事を聞知したれば、冒険にも河岸を溯り行く中に、日は全く暮れて何にも分らず、漸く我兵の居る物言を聞き之を頼りに進みしに槇峠と云ふ少尉にてありき、渡舟のことを話せしに、恰も同人も其命を承け居れりとの事にて、乃ち直ちに上流に上す事に取掛れり、渡舟は三艘なり、余は其先頭において敵前河を溯るなり、敵岸に至れば夜襲せらるる恐れあり、我岸によれば浅瀬あり中流にては櫓声を發す、夜暗とて何にも分らず、我等は中流にて櫓のへそへ手にて水を灑ぎ、或は棹を取り、或は攔岸する為め水中に入りなどして、漸く一里半の上流に午後九時到着せり、敵前の事とて火は点せられず、音響は無用なり、心細き事隙限なし、川風寒く手足凍冽し、人声絶へて、四辺暗澹の状況は筆紙の尽し得る所にあらず、凡そ十五分乃至四十分にして槇峠少尉以下悉く集りし

も時刻は何時とも分らず、我隊は来らず、或は途中の故障にもやと思ひ、約四百米も義州の方向に行き、嚮導の来らざるやを待ちたり

是より先き大隊長岡本少佐は中山一等卒の案内にて中州に出でしが、如何にしても廣漠たる砂礫に簾葭叢生する所ありて、何れに行くや不安の心を生じ、間違えなきやと正せずとも、一等卒は頑として聞かず、余は山岡中尉より直線に進めと命ぜられたりとして、道なき所を先導して傍若無人たりしかば、疑ひつつ進行し、山も近けりとして心配しつつある際、恰も余は地上に耳を附けて隊の来る音響を取り微行して之を迎へしかば、岡本少佐は始めて愁眉を開きたりとぞ

午後十時過と思ふ頃には渡舟場に到着せり、されど暗くして何にも見へず、余は敵の尚知らずにある事と場所とを報告し、二百米もある河中の処を渡舟せり、昼間は尚浅しと信ぜしも意外に深く、且潮流の關係にて流速急となり、漸々下流にて渡舟する事となり、皆二尺位つつは水中に入りて渡舟する事となれり、全く終りしは午前三時なりし

此渡舟までには恰も三度も水中に入りしなれば、左程の寒気と云はざるべきも、中州に息を凝らして天明を

俟つ間には、全く手足凍互し齒牙合せず、身体萎縮して肌粟已まず、さりとて火を用ゆる能はず、声は立てられず、沙を掘り足を入れしも却て寒気を感じ、二三人づつ相抱擁する外何事も致し方あらざりし、寒暖計は必ず〇度以下にありしならん、西風もあり、兵卒は尚夏衣又は夏袴を用ひたるものありし、如何なる寒冽を感じしや察するに余りあり

風寒く吹かば吹け、日本男子は冷かなる握飯、しかも氷りて食はれざるにもせよ、火なく水なく未知の河州にあるにもせよ、心の赤き熱さは一も不平を唱ふ違あるべき天道人を苦めず、見よ時に齋らし来る敵の音楽は近く我手に落ちん事を

二十五日午前六時天霧全く霽れ(朝鮮は此夜少しく雲あり)て人顔も分かり虎山は漸次霧を破りて其尖頭を顕んとす、義州高地の我砲兵は虎山に攻撃を初めたり、是を合図に中州に展開し、第一第二中隊は散兵す、第三第四中隊は大隊預備、第二大隊は第一大隊の右に連りぬ

午前六時三十分虎山の麓に小流あり、之を渡らんとするるとき(此渡しは深さ腰に及ぶ渡川場の分流)敵は始めて我の進むを知り得意の連発銃を以てピュピユと弾

丸を飛ばし、遂に我豫備隊の足許に來りたれば、これは耐まらずと、覚へず虎山東北の岩山に取り付きたり是れより我隊は虎山東北麓の鞍部に向ひて散開し進むや、一弾飛來り我小隊の藤井上等兵(清蔵)の帽を貫き、武藤從卒の右手を擦過し、一等卒深谷徳次郎の咽喉に中たれり、深谷は転々して谷地に倒れたり、之れ我隊戦死者の第一とす

敵は我射撃を開始するや、益々連發を始め、頂界線には一人も頭を出す能はざりし、余は密かに前方を偵視せしに、敵は三四十人にして旗六本を立て、何れも「三角の旗の図」(赤色に白字)大さ畳三枚位もあるものを建て居り、其我との中間谷地には独立家屋ある事を確めたり、恰も第四中隊は我左に散開して此敵を射撃し、敵は我に向て射撃せざりしかば、前へと号令せしも、一人も谷地に下るものなし、余は前へと連呼し率先谷地の一軒屋に下りしが、敵も去るもの此屋こそは射撃目標とせし所、弾丸の集る事無数となれば、皆家背に隠れて出づる能はず、余は無謀も再び前進して全く谷底に入りし為、死角内となれり、余に従ふもの僅に四人のみ、其他は第一回・第二回の位置にありて復進む能はざるものなり

余の谷中畑地にある際、大隊長は第四中隊の右翼に前進を命ぜしも進まず、漸く叱咤を受けて進みしもの中尉木村重行以下十五六名なりし、木村は余の左約五十米を隔てて小溝の中に入れり、恰も我義州台の砲兵は榴霰弾を打始めたれば、丁度我頭上にて毎発破裂し破片は余が左頭の辺へ落つる事四回なり(一回は三尺左、二回は一尺右前、三回は三寸左、四回は一間前)其三回目ときは当りたりと思ふ程土砂を蒙れり、此時は進むに進まれず又退く事も出来ず、四人の兵卒に狙へと云ふも頭を上にする事能はず、已むを得ず隣兵の銃を取りて急射する事七發、此時こそ余は生死以外の考へのみ、其考へも空漠なり、軍刀のそり、鏑の有無を無意味に眺めしのみ、嗚呼余は初戦なり、精神の定まらざる此の如きか、恐れなく苦みなく、全く少時聖人となりしなり

此危機に当りても幸に一の弾丸をも受けず、隣兵金丸吉藏は余に代りて重傷を受く

已にして第四中隊の小隊は左後の山上より敵に向ひ急射を始め、大隊長は前へと怒鳴りし声は耳底を驚かし、更に第三中隊前へと号令せり、此号令は直に蹶起の基をなし、知らず知らず天皇陛下万歳と大唱して突

貫せり、四人の突貫如何にも淋しき感ありしも勢なり力なり、是にて唱へ出せるなり、敵の余に向けし連発は皆弾道高くして中らず、第一掩堡は遂に奪取せしが、恰も第四中隊は左より市川中尉は右より共に掩堡線に到着せり、敵は散乱して潰走せしかば、之を射撃し或は追躡して斬殺し、その倒るるや万歳の声を挙げて益々之を窮進したり、軍旗二本を奪取せり、敵已に遠くなりたれば隊を集合せしに、市川中尉以下五十人に過ぎず、その他はいかがせしと顧聘の遑もなく、右方山上に銃声大に起り、大隊長は之に向て急進すべき事を命令せらる

依て東折して楊樹の並木辺に達するや川寄大尉・野元少尉は退却して並樹の線に據り、第五中隊の千秋中尉第六中隊の大西中尉も同じく退却し来りたる事を確めたり、川寄大尉は何事も語らず此地に於て防禦とのみ余に伝へたり

蓋し此隊は遠く敵前に向ひて栗子園西方高地に至り茲に大兵の逆襲を受けて退却し来れるなりしか、我三人の兵は其首級を取られたりと云

余の川寄大尉に會せしとき前面の敵は二三百名以内なりと覚へり、是より東方谷地に出てたれば聯隊旗は柴

山中尉の手によりて護衛されあり、此軍旗の爲めに士氣百倍し益々前進し突貫に突貫して四個の山谷を踰へしが、敵は我等に抵抗する事なく只退くのみなり、其時の状況は宛然兎狩りに異ならず、

午前九時半頃には栗子園の西方高地に達せしが、敵は最終の抵抗線と見へ防禦線に就きて我に對し、我も亦散開して之に向ひ谷を隔てて相にらめり、川寄大尉は敵線を偵察せん爲最高部の岩角に攀ち、其岩石の間より頭を出すや否や、一彈飛來りて左肩より肺を貫通して背中に至る、無言にして倒る、曹長岡田仲男傍らにあり用意の蘇息丸を吞ましめしも又嘔下する能はず、只山岡中尉を呼べと云、余は此報を得て到れば彈丸飛來して危険多きを以て之を中腹に下さしむ、大尉曰く、後とを頼むと、又言はず、余は承知せりと答ふ、敵退却せしやと問ふ、答へ退却中なりと云ふ、急に担架を命じ繃帯せしむ、気分は確かなり、而して顔色青く變じて又生色なし、依て奪取せし旗にて急造担架を作り衛生隊に送り、余は大隊長に報告し、即時中隊長代理をなす、従卒後藤松次郎を衛生隊に送り看護せしめしが、午後一時半頃遂に逝けり

此最終地は比較的死傷多く、其傷所は頭部腹部に多し、

乃ち知る、我地物の利用適切ならざる点多かりしお、敵は間もなく退却を続行したるを以て、余等は追撃射撃を命じ、遂に梨子園を占領す、敵は鬩河を渡りて九連城方向に敗退せり、

此戦闘中に三快あり

敗走者を後より一刀を浴せ首空に飛ぶ

銃剣を以て無二無三に突き殺す

敵騎百旗八本を立て我に向ふ、我小隊一斉射撃を以て馬十四頭、人三十名を殲せり

野元少尉の一隊は敵を独立家屋に押込め周囲を囲み激戦中にマツチを以て之に放火し悉く焼殺せり、聯隊は都合克初戦に勝利を占めたり、他隊の人は曰く、一聯隊にて十八營の敵を撃退せりと、其償として戦死負傷川崎大尉以下百九名ありしと云

戦後聯隊は鬩河を渡り梨子園西方高地に露營す、此の渡河中に敵は九連城の高地より発砲し、夜十二時に至るまで絶へざりし

敵の本陣地たる九連城安東縣は明日之を攻撃す、乃ち通天溝方面より我旅団は向ふ筈なり

偕夜明けて十月二十六日早朝より前陳の目的を以て通天溝に進みしが、敵は我聯隊の猛進にや驚けん、遂に

戦はずして退却し、又一兵をも認め(ず脱か)、九連城附近の兵力は実に二十五營なりしと云

右の終末にて難なく安東縣に入り舎營せり、砲十二門(内速射砲二門ありと)、糧食等山の如く鹵獲し米のみにも千五百石ありと云、捕虜は七十名なりと、此日行程約六里

安東縣は鴨綠江口の一都會にして可成に繁華の地なり、されど支那兵の略奪に遭ひ、又放火せし為、戸数は大に減少せり、其表町とでも云ふべき所は中々立派なる建築なり

一川を隔てて清韓の様子を見るときは、全く正反對にして韓国は恰も乞食小屋の如く、清国は士族屋敷風、或は西洋風の建築にして、貧富の程度一見甚だ奇なり十月二十七日は安東縣滞在と思ひの外、敵を追撃する為、大東溝に向ふ事となれり、其支隊は大迫少將の令下にして歩兵第六聯隊・砲兵一大隊・騎兵大隊なり早朝出發せしが、僅かに八里位なりと聞きしに、實際は十里以上の行程を経過し、日暮尚大東溝に達せず、火光を認めてやれ大東溝、やれ大東溝と云ひ合せて行きしも、中々着せず、午後七時過に至り天を焦がすの火光は正に大東溝なるを知る、一望千里とても云ふべ

き廣野なれば、手に取る如く近きも尚二里以上を隔てり

大東溝には敗兵五百人あり、兵營を焼きて散乱す、兵營の火葉は一時に爆烈(裂カ)し銃声豆を炊る、如何にも、劇戦なるが如し、然るに、其第三大隊(前衛)は已に同地に進入せしなり、而して殘兵尚出沒するを以て同地には前衛のみ入り、其他は村落外に途上縦隊の儘露營せり、純粹立往生にて銃劍を附けたる儘夜を明せり

幸いにも敵の逃ぐるもの我隊に向ひ来り、奇声を放つ為、銃劍の試し突きなぶり殺し等をなす、其最も甚しきは三人にて頭髮を掴み一二三にて之を引き頭髮を抜きたる後、七ヶ処の突傷を與へしもありし、非文明とは云へ、敵も中々頑強抵抗するを以て、如此の已むを得ざりし一時の觀なり

第三大隊方面にては、割木にて撲殺、石瓦を以て頸部を壓せしもの等ありしと、余も三人計は首部に致命傷を與へたり

此夜糲を食ふのみ、天明頃に屍体火葬の火にて土人の作りたる包米餅(もろこしの粉を以て餅になせしもの)を焼食ひ、頗る飢を医せり

十月二十八日大東溝市街に入る、安東縣には及ばざるも中々立派なる市街をなす、本日滞在、午後雷雨あり、朦朧として咫尺を弁ぜざる大雨なり、支那兵の涙雨か十月二十九日滞在、汽船二艘大東溝沖に現はる、憲兵之を検して我が軍たる事を知り、歩兵中佐林忠夫之に搭乘せる兵站部たりしと云

当地に孔子廟あり、頗る立派のものなり、日本の寺院風なり、此廟にて大砲彈三千、火葉若干を蔵しあり、辰次郎發見せしと云

滞在中の徒然は只食物のみ、豚もあれば砂糖もあり、少々なれど野菜あり鶏もあり、之にて御馳走の工面に忙はし、殊に餅米を見付け出し、餅搗を計畫せり、臼もなければ杵もなし、如何にしけん、漸く餅の形のものもを製して之を食ふ味ひ頷の落つるを恐る

十月三十日日本も滞在の積りの所、俄に安東縣へ招致せらるる事となれり、其故は鳳凰城方面の攻撃に參與する為なり

之が為め俄に結束して歸路に就き、十四時間の行軍にて安東縣に着せり、足棒の如し、途中軍參謀青木砲兵大尉(宣純)来り、支隊長へ鳳凰城は陥落せしに付、大東溝へ引き返せとの事なりしも止るに宿舎なく、又

安東縣へは二里の近くにありしを以て引続き安東縣に到る事となりし

十月三十一日午前 於安東縣

昨夕一書を裁し□戰郵便に托し候間、御一覽被下度、辰次郎にも面会、虎山戰鬪後至て健康に御座候、左に見聞の一二を申上候

父上様

金藏

鴨緑江 虎山の山麓を繞廻して安東縣より海に入る

此川は清韓の国境をなせる大河にして泥川にもあらず、石沙交りの河にして中三百米あり、一里以上に互り深さは三尋以上に及ぶものありて、徒渉は絶念なるのみならず、海口より十里位は小蒸汽の遡江を許すと云ふを以て概略御承知ありたれ、河中に大島あり人家之建つ、其名は中江台とか云へり

家屋 一般に外観は煉瓦造にして随分立派に見ゆるも、屋内は至て不潔にして空氣の流通悪しきが如く、暗黒室多し、一種の臭氣あり、アヘンかんにくの臭氣なるやと思はる、各家大抵豚を養ひ食用となす、不潔鼻を掩ふに堪へず、焼酎・うどん粉・大豆等沢山なり、安東縣・大東溝近傍は主として高粱と包米(もち)

こしの事)とを常食とす

安東縣附近は西北に山を帯ひ、東南に海を控へ、開港場には適當なるも、海岸浅く大船を入るゝには適せずと聞せり、又冬は凍港となると云ふ

安東縣より大東溝に至る道路(海岸路)は畑中を通ずるものにして、毎年一定したる道筋にあらずとも川五條あり、皆小なり、然れども河底泥質なるを以て架橋なし悉く徒渉を要す、沿道凡てもろこし畑なり、村落は二三軒づつ処々に散在す、其間、十七八町より往々一里以上に及ぶ、此家屋は上部はもろこし桿を以て掩ひ、其上に土を塗る、壁は泥を煉瓦の如く固めたる方形のものを積み重ね、或る部は其上に泥土を塗る、室内の狹隘不潔は言語に絶す

支那人の体格は一般に肥大にして長六尺以上のもの多し、悉く辮髪なり、足には(靴の図)の如き毛氈製の靴を穿つ防寒用なりと云、婦女は難を避けて存在するもの尠しと云

敵状に就ては鳳凰城は立見少將已に之を占領せらるる福島中佐は第十八聯隊の一大隊半を率ひて五柳洞に赴く、第六聯隊は明日より大孤山に至る大孤山には運送船着すと云

敵は最早三十里以内には存在せず、支那人は一般に我を歓迎す

目下の食料は支那米、うどん粉、砂糖、豚等なり

労働の結果にや、我牛馬漸く倒るるもの多し、運搬力には苦心なりと云

氣候は已に甚た寒くして雪空の如し、天明殊に大寒の趣あり、近送の毛布来らず、只マント(又は外套)と分捕の羊皮にて不潔なる家屋内にて日を送りつつある有様なり

水は一般に悪水なり、遠方より飲料水を取るか、又は澄したる水によらざる可らず、従て下痢病多し、然れども足痛程は多くあらず、已に一戦をなせし事とて、各人必要品の携行を種々に工夫し、過量の食品等を携帯して十余里の行進を継続する現況なり

十一月二日午後 於大東溝

去る三十一日附を以て安東縣より二通書状差出候間、鴨緑江戦闘の事は御承知被下候事と存候、右一通は一等軍曹田中貫一君の好意上送り申候次第に候

漸々寒氣に向ひ候為め、清国は日本兵の定めて糧食に困難するならんとの考なる由なるも、日本の運送船にて続々糧食を揚陸せしむる事とて、頗る狼狽すとの説

あり、又各国全権公使よりは、冬期に至れば清国は和を容るゝに相違なし、依て今の中に早く廣く土地を占領し置けと申来りし由に噂さ申候

追送品は未だ到着不仕候、今後靴一足は是非とも早く御送り被下度候、只今は人々皆酒・煙草には大窮に候、大孤山に至れば多分便利ならんと申居候

殿下へは宜敷執奏儀、角田敬三郎君へ申入れ度、来る三日は行軍途上遥拝の積りに候

父上様

金藏

尚々十一月三日には第二軍旅順口を攻撃すと愛宕艦の喇叭手より聞及候て相楽み居申候

十一月十五日

大孤山港 發信

追々寒氣募り申入所御安泰の御儀と奉寿候、当地より郵便は迎角都合悪敷大に遅引相成候、御地よりは一郵便にも接し不申、定めて近日は糧運多忙の事とて日間取り可申事かと存候、別紙に日記相添申候、尚御地の景況も拝見仕度存候

父上様

金藏

十月三十一日 安東縣滞在

敵の九連城及安東縣にありしものは、合計四十六營にして、一營五百人として約二万三千人、或は云ふ、一

營六百二十五人に編成せりと、さすれば二万五六千人なり、此内我聯隊に向ひしは十八營にして、彼是一万人近きものなり、此敵は盛字軍・毅字軍・銘字軍にして、一部は奉天より一部は旅順口より来りしものなりと云、茲に一笑話あり、平壤の戦に日本軍皆白ツボンにして人夫等は皆黒ツホンを穿てり、故に鴨緑江の戦には我兵を認めて人夫なりと思ひしに、囚らすも我兵なり、偵察の間違とて大に大敗を取れり(捕虜の言)と、当時白ツホンは皆汚れて鼠色となりしを以てなり

師団司令部附田中軍曹(貫一)より瓜漬・醬油・味噌・支那焼パンの寄贈を受く、尤も珍とせしは醬油エキスなり、当地此品物は太宰の珍に勝る事方々なり

十一月一日

軍司令官の命令によりて又々大東溝に向ふ事となれり、同じ路の往復、殊に何の見るべきものなき廣野の行進は疲労殊に甚しく、七里にして老爺窟附近の無名村に宿泊す、患者十一名を安東縣へ残せり

此日より新中隊長遠藤伸二郎に中隊事務を引継けり前日に射殺せし清兵の死骸を取片付けるものなき故を以て、群犬争て之を食ふの状尤も慘なり、其食ひ尽せし跡は頭・手先・足先及び陰部と骨とを存するのみ、

陰部を食はざるは何故ぞやと人々怪めり

十一月二日 行進を起し五里にして大東溝に達す、

大東溝は前日随分食ひ過しの食物もありし事故、樂しみて市街に入りしに、凶らんや、市街は全焼して豚の丸焼・ウドン粉の焙り立てであるのみ、失望際りなし、僅かに町外れの陋屋に夜を撤せり、聞く、前日我軍の去るや、土人等富家の物品を略奪し、火を附して跡を隠したり、同地は水利の悪きと消火の方法なき為め見す見す全焼の悲觀に陥り、我第四中隊の再び此町に入るや、消防に力を竭して町外れ丈けを防止せりと
第二軍は大連湾の東十マイルの貔子窩と云ふ所に上陸せし由、明後四日、五日頃には海陸総攻撃にて旅順口を陥すとの風評なり

安東縣に民政廳を置き、外務一等書記官小村寿太郎を以て長とし、支那人一切の事を取扱はしめ、憲兵及び後備大隊を置く日本領地となりし故なり

日本酒一人に付五勺、紙巻煙草同上に付三本

第七、第八中隊は小野寺少佐の指揮にて大東溝に残留し、其他は前進すべし

十一月三日 天長節なり、午前七時出發準備を以て孔

子窟(大東溝の東端)の西の廣場に整列、君ケ代を吹奏し、捧銃東嚮、天皇陛下万歳を三唱す、終て發進、午後三時范家子に着す、支那人三名我等を大人と稱し、非常に厚遇し、水火湯茶を供して万端の周旋をなす、殊に支那語をも一二習ひ大便利を得たり

十一月四日午前七時出發し、老爺窟の東「タンカトン」(湛家屯)に泊す、行程五里半、宿舎狭陋を極む

十一月五日午前七時出發し大孤山港に着す、途中大洋河を渡る、此河は大孤山港に接し其流域一般に沼沢にして水田に適するも土人は全く之を放棄せり、大孤山あり、岩石山にして高四百尺、平野の間に兀立す、此山を東より北へ一繞回して越ふれば、日本の古城地の如き一門設けたり、関門なり、之を大孤山港の入口とす、戸数五六千ありて四角形をなす兵營あり、旗人あり、

去る三十日鴨綠江の敗報達するや、支那兵は土人の豪商の家に入り金銀を奪ひ家屋を焼き、大略奪をなして逃去る、依て殷富なる部は凡て烏有に歸して只四壁立あるのみ

我隊の当地に来る少し前、歩兵中佐福島安正は歩兵第十八聯隊第二大隊を率ひ安東縣より湯山城龍王窟を経

て此地に來着す、同中佐は専ら人民を招撫し招徠を力め、又告示を貼付して日本軍は清人の安業を害せず、之に背けば嚴罰す、本年は地租を免す、民政廳を安東縣に置く等を告諭せり、是を以て当港の如きは人民倚頼し、使役徵發等に至大の便を得たり、清人は福島大人の命と云へは殆ど神宣の如くまでに尊重せり

十一月六日 騎兵大隊(二小隊欠) 及我第六中隊は第二軍と連絡の爲、貔子窩に向ひ出發せり土人は続々我軍を慕ひ歸來し我の便利益々多し

十一月七日大孤山滞在に付、午前騎兵中尉遠藤孝太郎を訪問し、平壤以降の戰況談の交換をなせり、午前十時頃に至り命令あり、兵卒二分隊を率ひて旅団司令部に至れと、依て辞去し、同司令部に至れば、福島中佐護衛として当地北方約二里にある「ダーズウイン」村に至る事、是なりき、此村は図上打頂と記しあり

中佐は二十万分一函を以て余に此村名を示され、且つ支那人一名を嚮導となす事を告げられたり、其目的は物資徵發にあり、中佐は此村に至り、村長に米・豆・粟・高粱・もろこしの現在高を問ひ、銀錢にて之を買ふ事を以てし、若し聴かざれば兵力を用ゆる筈なり、然るに村長は中佐を徳とし、粟三十石・もろこし五十石・

大豆十石・高黍十石を提供せり

此掛合は中佐自身に之を折衝し、嚮導の支那人も奔走せり、故に余等は何等の用もなかりし

村長の聚集せる間に中佐は昼食を命ぜり、清人はウドン粉を麵包の如くなしたるものを焼き、大せんべい程の大きにして卵子焼をも持ち來れり、余も此馳走に預れり、其時中佐は次の談話をなせり

一、此辺は古の滿州なり、故に人は善良ならず、恩を知れば又威を見る、故に使役し易し、人民は皆金銀を喜ぶを以て五錢もやれば充分に働くなり、

二、此地より北に入れば豚は沢山なり、冬季中肉類に差支へなし、牛の如きは野放しの事なれば尤も良好なり、

三、虎山戰の事を問はれ、之に答へたりし、旅順口には当時新募兵あり、故に我軍の勝利疑ひなし、只清兵は最初の意気込強し、併し後の力はなし

四、清人の考にては、日本人は此冬を過し兼ねるならん、此冬には和を求むるならんと云へり、故に我々は是非とも此冬に力を養ひ、來春に至れば一挙に北京を取る事を得ん、敗又敗の報は目下清人の膽を奪ひつつあり

- 五、此案内者は大孤山港の豪商にて大なる家三軒を有せしが、二軒は放火せられたり、此男の父は秀才にして当地の名家なり、此男等を集めて支那人の科を設け目下糧食の売買をなさしむ、目下其長に一日三円の給料を與へある故に勉強す、此男には一日一円五十銭なり、唯土人を招撫し我用をなさしむる事は急務とする所なり
- 六、中佐は先年騎馬旅行に付、毛革一枚を軍衣の下に着せられしが、今日の氣候にては熱い位なりと見せられしが、それは羊の腹毛にて小さき柔かき白色綿毛なりき
- 七、中佐は大食家なり、大煎餅の如き麴麩を五個食はれたり、余は二枚にして充分なりき、中佐曰く、此食物は満州蒙古の人の常食なり、腹持ち極めて可なりと
- 八、中佐曰く、朝鮮人は半開化の程度にも達せず、彼の有名なる大院君すら日本勝てば日本に属し、支那勝てば支那に属すと云ひし如く、皆々遊惰無学にして只煙草を愛喫するのみ、清人は見らるる如く生活程度も高く煙草吹く人の少きを見て、其働き人の多きを証せらるると
- 九、支那婦人の足は、大なるは五歳の童子位にて、小なるは全く摺木の如し、此小なる程美人なりと、故に、美人は歩行する能はず、珍らしき片輪者なり(余も此村長の妻の足を見しが先づ大猫の足程にて三十四五才なりと)
- 十、支那は婦人のために必ず閨房を設く、茲には男子入るを許さず、余は福島大人の休息所として設けられたる此室に入りしが、裝飾は日本の表座敷と云ふものに当れり
- 十一、冬營の場所は未定なれど、大孤山港辺の氣候なれば東京と大差なしと、其故は山を北にし海を南にするを以て格別煖気なればなり
- 午後四時に至り、村民は車四臺(一臺に付馬五頭曳き)にて糧食を運搬し来れり、之を發送して帰港し、午後六時半に帰舎せしが、此時は濃霧深くして一寸先きも見れざる程なりき
- 十一月八日 本日鑄方砲兵大尉の宿舎に浴場あり、依て入浴をなし、朝鮮以来の垢を一掃せり、身体二三貫も減せしかに思はるる程清爽なり、しかも浴槽は膏にて已に臭気を帯びしにも
- 目下室内は秋の心持なり、何となれば支那家屋には床

下へ暖を通ずるの装置あるを以て湯なり飯なり焚ければ、其煙は床下を通じ床上を熱すればなり、之に反し室外は寒尤も甚しき差あり

十一月九日 俄かに前哨中隊となり、劉家屯へ出発す、支那兵の一部は金州城の方向へ走り、大部方は岫巖城へ向へりと聞けり、劉家屯の土人に就て土語二三を学べり、モロコシを餅状に製したるを包米パオミーと呼ぶ土人の常食なり、之を求めて大に胃を喜ばしめたり、此土人に雪靴一足を買へり

十一月十日 大孤山港へ帰る、聞く所によれば騎兵大隊は第二軍と連絡し、第二軍は去る六日金州城を攻陥し、八日には海軍と合して大連湾を攻撃する筈なりと、又敵の大将は遼陽城にありと

午前七時相淵大尉は一中隊を率ひて土城子に赴く、是は岫巖城の敵に当る為めなりと

昨日劉家屯へ藤林大尉来りたり、其談話の要旨次の如し

一、大孤山には兵站部を置かず、故に糧食は七八日分あるのみ、明日監督部長は急行して来る筈なり

二、当地にては毎日福島中佐は徴發に出らるるも、拙ても我軍隊を養ふ程の糧食は備らず、殊に米は全

く一粒もなし、師団では物資沢山との見込ならんも、此の如き有様にては如何ともなす能はず、冬營の場所も今以て分らず

三、旅団長よりは度々此地は船場でもあり、暖気であれば冬營せんと肉筆親展書を師団長へ意見上申せられたり

四、過日も糧食を大東溝兵站司令官林憲兵少佐より大孤山へ廻し呉れしに付、今日食料に窮せざるも、監督部長は兵站部より直接作戦部隊へ糧秣を補充するの権なしと云ひて、師団長は為めに同少佐を叱責せり、此の如き始末故に此後追送品の如きは何時来る事やらさっぱり分らず

十一月十一日より福島中佐の尽力にて大孤山港に市を開く事とせり、先づ将校用の分のみなり、換算は銀一円に付清錢千百四十八文の割とし、栗一個二文、柿一個八文なり、高價には相違なきも得らるる丈けは慥に中佐の功績なり

奥宮大尉来談あり、空知丸に米千石と之に要する罐詰肉を搭載し入航せり、先づ四五日は糧食安全なり、監督部長は未だ来らず、冬營地も今以て分明ならず本日より練兵を始め兵卒をして寒氣に慣れしむる事と

せり

十一月十二日 兼て十月二十四日黒田甲子郎に約束せし東京日々新聞十月十三・十六日分を聯隊へ送り来れり、依て一見せしに、平壤及安州の景況のみなり

昨日日本酒一升を中隊將校へ分配せらる、又前進か戦鬪かと申し合せ候、

恤兵部の品は何にも到着せず

本日午后去る虎山の戦に功ありし下士十二名兵卒五十三名を師団へ報告せり、本日聞く所にては、岫岩城には敵凡そ二千人ありて、馬玉崑も之に居り、目下負傷の治療中なりと、依て旅団長は之を攻撃せんとの意見を師団長に伺ひ中なり、兵站部は大孤山に置かるる事となり、又后送品は安東縣まで来りたりと

本日の噂さにては山路中將は力瘤を入れずして旅順口を取りしならんと、

本日は風寒くして雨雪なり、氷は厚く蠅は夏よりも却て多き覚ゆ、冬營は此地に於てするなど尚風説せり

十一月十三日 騎兵第一中隊は岫巖城に至る道路偵察の爲午前七時出發せり、我隊も今四五日の中には岫巖の敵を追ひ撃つ事となるべし、されど后送品は又々後るべし、冬衣、夏袴や夏襦袢、袴下のものに對しては

如何にも同情に耐えず

本日次の勅語を賜りたり、第一軍司令官山県伯爵より通達あり

汝等の忠勇なる善く百難を排して進み、敵を朝鮮国境外に撃退し、遂に敵国に入り要衝の地を占領す

朕深く之を嘉尚す、時方に沍寒に向ふ、汝等夫れ各自愛して將來の成事を期せよ

中尉鶴岡信一は義州兵站病院にて赤痢病により死亡

十一月十四日 今朝までに米七千石を陸揚せり、されど副食物なし、米だけは先づ支隊の五ヶ月分を支ふべし、尚続々運送船は来る筈なりと

本日聞く所によれば、敵の岫巖城にあるものは城を焼きて走ると、又騎兵大隊及我第五中隊の報告によれば、敵の騎兵二十・歩兵三十計り(地名不詳)に於て我に向ひ射撃す、第五中隊の一小隊は之を破りて前進す、此の如き形況により第三大隊は明日急行して岫巖城に向ひ、事によれば旅団も赴く筈にて、後の報告を待つのみなり

第二中隊の一小隊は李家山へ分遣せらる

本日梨を旅団より分配せられたり、其時には第一大隊

は多分当地に冬営するならんと風説せり

十一月十五日 第三大隊は出發す、当大隊も明日出發の筈なり、多分敵は退去せしならんとの事なり、四五日後には大孤山へ帰り、冬營かと申候

十二月五日午前十時 岫巖城發

十一月十五日午後に至り命令あり、歩兵第六聯隊の第一大隊・第十八聯隊の第二大隊・砲兵第五中隊は明日出發して岫巖の敵に向ふべし、第六聯隊第三大隊・騎兵第三大隊の第一中隊と第六聯隊第五中隊は已に先發しあり、敵は二千位なりと云、鳳凰城にある歩兵第二十二聯隊の一大隊は同地より岫巖に向ふ筈なり、依て軍事郵便一通を川住旅団書記に託して發送せり十一月十六日午前七時出發、揚家炉に向ひ前進す、敵は岫巖城南凡そ一里半位の所に堡壘二ヶ所を設けたりと、鳳凰城の支隊は去る十四日に進み、我騎兵と連絡す(後に聞けば此連絡騎兵は遂に第二十二聯隊に還らざりしと)

土城より以北は道路と名付くべきなく、唯水路らしき谷間を迂回しつつ進めり、天氣晴朗なれども風寒く汗全く出でずして小尿頻りに便す、川は至る所水ありて其上を通すべし、露營は最早出来ず、貧屋に雑居して

宿營せり、行程七里

此日三等軍医柴田鑛太郎腸質扶斯にて死亡す

十一月十七日も天氣晴朗にして風なし、岡本少佐の談に、九連城安東縣附近には大砲總計八十五門を分捕せり(蠣寄參謀の話)

午前十時騎兵の報告あり、昨十六日午後三時三十分發、第五中隊の報告に、該中隊は桂花嶺を占領すと、第三大隊の報告に同大隊は土門子嶺を占領すと、土門子嶺の敵は二百と云ひ四百と云ひ、また五十とも云ひ、一定ならず、斥候の報に敵兵約四百人紅家堡子の川を徒渉し、我に向ひ前進し来ると

蠣寄參謀の話に馬玉崑は元來旅順口の砲台長なりしが、鴨綠江に破れ岫巖にて療養中なり、此敵は我軍を見て幾回か退却せしが、今は二千人位は集り居るならん、鴨綠江の戦鬪にて敵の死傷は四五百の間にあらん、但鬮河を渡り退却するときの死傷者は多大なるも、積算する能はず、我軍の持来る砲は十五珊攻城砲二十門、白砲十門なり云々

午前十時二十分に第三大隊の午前八時十分發報告あり、土門子嶺の敵は退却せり、第三大隊は行進を続行すと、此時銃砲声甚だ盛なり、是れ第二十二聯隊の大

洋河をわたるものならん

我間諜の報に岫巖は焼けず、僅に一二軒の火災に罹りしのみ、敵将は李・揚・馬などなり、鋭字軍なり、商家は門を閉ぢ、民家は清兵の舎営となり居ると云ふ我第一大隊は捷路を取り缸家堡子に至れば岫巖南方高地に敵は依然赤白の旗を立て御祭りのに射撃をなす、我第九中隊より敵は前面の高地にありて約四五百名を増加し来りつゝ、ありとの報あり、我大隊（第三・第四中隊）は之に応援する為急跡をなし、屏風を立てたる如き高地の頂点に攀上れり、敵は恰も谷底にあるが如く、我を距る事千七八百米もありて射撃の功力なし、偕聯隊は次の配備を取りて日没に至れり

（戦闘配置図あり）

此日は此儘にて戦闘を止め、敵味方共前哨を張りて互に對峙せり、我第一大隊は何れも山腹に露營し、余は小哨長となりて高山の巔にあり、夜は深々として所々燎火の点々たるを見るのみ、其燎火は悉く皆敵の所在を示すものなり、味方は闇として、何れにありや更に不分明

午後十時頃より敵は退却を始めたが如く、我斥候と衝突すれば射撃しつつ、岫巖方面に退くか如し、月出

る頃には一兵も残らず退却して岫巖に向ひしものごとく、岫巖の南なる大洋河まではまた何の障りもなく、斥候は往復するに至れり

聞く所によれば歩兵第二十二聯隊は鳳凰城より岫巖の北に出て本日戦闘せしが、其大洋河を渡るとき激しく敵砲の為に損害を受け、漸く岫巖城に近きて天明を待ちつつありと

十八日午前未明より敵を攻撃する目的を以て午前四時騎兵は前進せしが、此騎兵の進むや、敵は已に岫巖を退去し、西北の山を越へて退却せり、格子山とか云ふ山なりと、我中隊は岫巖南方の河に沿ひ下りつつ、岫巖街道に出でんとせし途中、格子山に多数の敵の大打李らしきもの乃ち車輛等は集団しあり、一部は西北に行進しつつあるを目撃す、依て行軍途中斥候を其方面に出し、中隊長遠藤大尉に告げ、其方向に小隊を向けしが、冒険なりとて引返すべき命令あり、空しく一弾をも退却兵に加ふる事能はざりし、後日此事を大隊長・聯隊長・旅団長に話せしとき、それは残念なりし、其当時此報告を聞かざりしを以て、何の処置をなす違もあらざりきとて、其地点等巡視の節、余に嚮導を命ぜられ説明すべく命ぜられたりき

此戦に鹵獲は大砲四門後二門ありしと、其他麦豆黍等の食品は山の如し、但し米は九石のみと云ふ、我死傷は第二十二聯隊に一名輕傷ありしのみと聞けり

聯隊は此地に滞在する事となり(第一第三大隊及騎兵一中隊にして塚本大佐の指揮を以て守備)冬季を此地にて過すとの事なり、依て我々は大孤山にて冬營する積りにて食品等を残置せし故、給養軍曹を大孤山に遣はし取寄す事とし、第二大隊と第十八聯隊の第二大隊・砲兵大隊・騎兵一中隊は大孤山に第二十二聯隊(三原中佐)は鳳凰城へ還る事となる
本日は岫巖城に入り舎營す、中隊長遠藤大尉は物資取調委員を命ぜらる、是は第二十二聯隊齊川大尉の調へたる物資を取纏める事なりと云ふ

十九日

「一緒にし形を取り纏める」と注記あり)

午後一時より旅団長・聯隊長・大隊長・橋本大尉・村山大尉及余は前方に出て警備線を巡回し、戦術上の研究をなしたり(此時余は中隊長の代理なり)

旅団長の話に馬玉琨は当地にて療養せし事は事実なり、是は虎山の戦に馬は九連城より虎山の應接に至るとき右頬より左頬へ打貫かれたればなり、馬の母は之を心配し

弟を此地に送りしに、此弟見舞に來りて戦死せり

聶は牙山に敗れ平壤に敗れ、又虎山に敗れしが、此度も又敗走せり、此時聶と馬とは戦はずして退却せんと云ひしを揚は初戦とて聞かず、此揚がしんがりなして退却せりと云、揚の曰く、諸大人は皆退走に巧みなる人なりと、いかにも揚も亦退却に巧みなる人なり、可笑

二十日

此日旅団長以下大孤山へ還る

当地には土族多し、此土族は皆兵なり、故に人民多く去りて居らず、貧人等來りて土人の物を盗む、亦大行李の入夫等は兵とともに掠奪し金銀類を取り去りしもの多し、目下取調べ中なり、衣類の如きは尤も多し

食品は取調べたり、此食品とは大豆・塩・小豆・菜漬、油・醬油等なり、亦薪は十分あり、ただ米不足なる故小豆三合米三合にて一日一人の食料なり、其一合の米も僅に六七勺位に過ぎず、米のなきに小豆と混するを以て全く小豆食にて生活の姿なり、來る二十七日ならでは大孤山より米は來らず、粟の粥小豆の粥等生れて初めての食物にて猪豚鶏アヒル菜葱等は沢山なり

此日慶豊衣局とて王元明と云ふ質屋あり、此質屋には金銀山の如く衣類四五の庫に満つ、支那兵、我兵、入夫等

の乱入に遭ひし後なれとも尚沢山なり、余は此家を聞き取締をなしたれば、此主人大に喜び、毛皮(上等狐の裘と鼠の毛の裘)とを僅に二円銀にて売り呉れたり、此毛皮は敷布、シャツ、袴下となせり、日本にては二十円位の品物

二十一日

此日羊一頭を一円にて買ふ、其地珍事なし、支那煙草(アヘンにはあらず、日本の如くにて味尤もからし)砂糖(下白、又は紅、又は黒)シヨウチュウ酒、黄酒(日本のぶどうの如く少しく甘し)みかんの砂糖漬、梨子、氷砂糖、人參の味噌漬、味噌、醬油等を集め貯ふ、岫巖城は二丁四方位にて周囲はレンガにて高く積みたる土塀なり、ほりなし、(支那の城図、四方皆同じ、二丈位なり時には三丈位)(城門の図あり)東門を旭昌門、南門を阜昌門と云、西と北は門なし、人家は多く石又は煉瓦造りにて、本道の如きは尤も壮麗にして戸数三千位もあり、城の東南に連接す、城と云へば城、大家と云へば大家なり、されど城内には中々立派の建物多し、後便悉しく述べん序に云ふ、城の門は皆とんねるの如き作り方なり、而して皆正方形なり

岫巖より大孤山に至る町外れに文昌門あり、観音堂の如

し、其近傍に寺又は廟と云ふが如きものあり、此門の内外は斬罪者をごくもんする所なり、我兵の入りしとき二人の首ごくもんにしてありし、一は切り立て、一は二三日を経しもの

此城には処々に告示あり(告示とは日本の達しの如きものなり、張札なり)之には日本軍の爲めに敗られ残念云々の言あり、又搶掠するものは斬る、敵に内通するものは斬る、婦女を姦淫するものは斬る等の告示もあり、告示は凡て人の集る場所に何処となく張りて掲示す、日本兵の事を倭兵と云(日イー、本ベン、兵ヒョン)とも云)、日本兵入り来りて又告示をなし専ら安民の事を述べ、人民等皆来り集り之を大声にて読み(必ず声を出す)我等を見れば皆敬礼す

二十二日

昨夜雨降る風あり、寒き事甚だし、雨は皆雪の小なるが如きものなり、此地雪少く風寒しと、此日の如きは二、三十分にて捨てし水は皆氷り、水瓶の水も氷る(家内の水瓶)

質屋の王子香(五十才)逢太年(四十六)揚徳宏(五十二)は王元明の代理として、先日の取締の礼として乃ち保護の礼としてぶた一頭を送れり、依て料理を依頼せしに料

理人來りて料理し呉れたり、支那人の料理は重に塩にてなす、醬油は用ひざる事多し、故に少し甘し、我々のから口には醬油をつけて食べり、味尤も良巧にして、上等の西洋料理の如し、矢張りコシヨウ・クルミノ油・ゴマノ油・シイタケ・サンシヨウ、等を用ひ、又菜、葱、鶏卵を交ゆ中々の上等なり

揚徳宏は此質屋の番頭にて絹布を着る、余と心易く何品にても求め呉るるは都合なり

二十三日

此日前日の料理人來りたれど、前哨に相当したれば明日來れと云ひて歸せり、午後前哨として格子山の方向、蓋平城の方向、鳳凰城の方向へ諸兵を出して歩哨を張れり、余は中隊長代理たり、土人に就て我が携ふるロバと鶏・あひる二十羽と交易せり、唯今は各中隊大抵七八頭のロバを携へ、之に物を載せて行軍するなり、此の日稍暖かなり

二十四日

午後前哨より歸來したり、第二中隊は本日大孤山より着す、大孤山へ置きし物品も皆着す、十月二十八日出の宇野大尉よりの書面拝見、父上様始め皆健全なる事を知る、郵便(二錢切手の普通の郵便物)は先づ二週間より三週

間にて何時にても着す、新聞にても同じ、十月二十八日の新愛知にて虎山の戦の事を知る、矢張り電報にて早いなり、併し此戦は第六聯隊一手にて聯隊も第一大隊一手と云ふべし、故に士官の負傷は皆第一大隊のみなり、支那兵は曰く、日本兵は高地に上り下を向き射撃するを好むと、川崎大尉の如き矢張り最高地にて頭を出して敵状を見んとせしときに打たれたり、用心する事なり、宇野大尉の文中に二十五日に巾下一本松の近傍に火事ありしと、前田珍男子君は如何にや

二十五日

支那人の揚徳宏又來り倉に封印し呉れと云(支那人は印なければ用をなさず)依て之をなしたり、其礼としてぶた二頭を送り來る、大寒中の食用として養ひ置く事とせり、

本日は日本より郵便なきや追送品は手元に來らずや、酒保は來らずやと日夜待つのみ、若し閑暇あらば何人にても二錢奮發にて近頃の様子を聞き度、今日以後は來年の三月末までは左の如く表書せらるれば通ず

清国盛京省岫巖城に於て第三師団歩兵第五旅団第六聯隊第三中隊何の誰

と記せられれば通ずるなり、日本内地の郵便も異なる事なし、

飯田・岡本二君へも新聞の景況抜載を希望す、天寒く地遠く戦争は本年本冬には出来ず、冬籠り百日間食ひて寝ね寝ては又食ふ、此食物にも乏しく又寝むたくもなし、故郷を思ふの情誰しも今日より甚だしきはなかるべし、諸人皆同感ならん

追送を願ふものはさざみ煙草、又は巻煙草数百本とかんづめ、かつぶしの如き飲食品のみ、外にしんかき三本計り、他に望みなし、本日より入浴場を設く

二十六日

午前演習をなす、午後大隊長とともに揚徳宏の宅に至る、衣類其他若干点を買ふ、旅順口に向ひし第二軍は去る二十一日の朝未明より二十二日午前に互り攻撃し、遂に之を占領す、我軍死傷二百余人加農の大なる砲等其他食品を奪ひたりと、

倉田新七中尉は将校斥候として海城縣に行きしが、其報告に敵の蓋平縣にあるもの二百人計り、析木城には二千二人計りありと、中尉は此日に帰る(二日間なりし)

大隊よりあひる四羽来る、時に取りての好物

二十七日

本日雨天珍らし、後に聞けば大孤山の方は大風雨なりしと、

午後入浴せり、入浴に就て一奇談あり、風呂桶なし、故に茶風呂または瓶(かめ)を用ふ、或処には棺桶の新しきものに湯を入れて入浴す、清国の風として棺箱は(図あり)の如く細長き木箱にして、死者あれば一年乃至三年は其儘に入れて墓地に置き、三年の後に蓋を明け、死者の腐れたり肉をほじり取り、骨を再び棺に納めて始めて土を盛る例とせり、此棺を桶と心得死人を見て驚きしものあり、呵々

市川中尉は将校斥候の命を受く、明日より四日間蓋平縣・析木城へ出發する筈なり、倉田中尉も同じく皆騎兵斥候を護衛するにあり、

本日も云ひし事なるが、軍事郵便の無賃よりは二錢切手貼用の郵便が却て早く到着す、隊より出す手紙は後れたり、又紛失などする

本日より一日米五合、小豆一合づゝなり、先づ日本米に有つき升た

二十八日

午後当地火災あり、聯隊総出にて打消せり、冬營中の火事は真平御免を蒙る

朝鮮及此地ともポンプなし、又水に乏し、故に家をたたきこわして消すなり

我間諜の報によれば、敵は析木城に千人、海州城に七百人、遼陽城に十二營(六千人)あり、馬氏は析木城にあり、聶と豊とは海州城にあり、或人聶に奉天府へ行くかと問へば、聶は何とか云ふ所の西洋人の生命保険会社へ入り、毎月十五円づ、掛金をなしたれば、奉天へは行かぬと答へたりと、奉天府には七千人ありと云、依て合計四十營(二万人)なりと云ふ、されど清国の如く処々へ兵を分置しある上は、氣の毒ながら又々奉天までは何の苦もなく陥る事ならん、清兵の戦法を知らざる事三尺童子よりも劣れりと云ふべし、

鳳凰城にある島少佐よりの報に旅団の右翼へ敵が攻め来る模様ありと、我第十中隊は此様子を見ん為め、明朝出發す、敵が攻めるとは日清戦争以来の初耳なりとは一般の言、誰しもふき出せり、然れども油断は大敵なり、我軍の用意嚴重なり、依て大孤山にある第二大隊は二十九日より岫巖に来る筈なり

二十九日

島田中尉昨夕大孤山より帰り来る、同中尉の話に追送品は来れり、今二三日にて当地へ至る防寒用の品も来れりと、大安心々々々

本日より岫巖西北の山へだいばを作り、分捕の大砲を之

へ備へる筈なり、最早此地を冬营地と定むるなり、岡崎亀雄より十一月二日出の手紙着す、父上様より我写真を送られし礼を述ぶ、亀雄は神戸下山手通七丁目とあり、五錢の郵便切手を貼用しあり、御丁寧の事なり、二錢でよいのに、又同人より虎山の戦勝を喜び来る、桑名貫一は平壤にて即死なり、病院にて死せしにあらざ、

唯今は上から下まで毛皮にて包み居候故、耳の外は寒からず、氣候は先づ日本の十二月中旬より下旬頃に同じ、但し寒風の時は丁度正月の如し、されど室内を暖にする故、室内はこたつに入り居るが如く、夜間にも汗する事あり、是れ清国の家屋の作り方は火を皆床下へ通ずる如く作りあればなり

郵便は結構なり、清国にて何の誰朝鮮にて何の誰と云ふ表書にても陸軍何々とあれば大抵一ヶ月を経ば達するなり、但し一々返事するの頼りなきには平向々々

三十日

本日聞く所によれば、第五師団の西山中佐は某中隊を寬甸縣の方向に偵察に出せし、而して其一將校は斥候として寬甸縣に入りしに、茲には敵兵(吉林省の兵)一万兵計りも居り、北南西の三門を閉ぢられしが、僅に東門より逃れ、夜間三里程退却せしに、翌朝又千人計りの敵に

縦横より攻め立られ、六里程退却せり、依て西山中佐は一大隊と砲兵一中隊を以て、立見旅団は西方より曖迷河辺と云ふ所より此敵を攻撃する事となれり、一昨日鳳凰城の島少佐よりの報告とは此事なり、

本日第二大隊は此地に來りたり、第七中隊は今尚大孤山にあり、辰次郎も來れり

十二月一日

將校斥候市川中尉の報に、敵は析木城にあり、凡そ二千人以下、我騎兵は敵の騎兵と小戦闘の後敵の騎兵敗走せり、死傷なし、析木城とは岫巖より十五里西北にあり岫巖の西北二里の山は皆白雪を戴き河水皆氷る、行路絶へる計りなり、岫巖は本日少雪とあられふりしのみ、寒氣は甚だしからず、されど道路は皆凍氷し終日氷とけず、日本一月位の事なり、手拭に水を付けば十分にして全く氷る、寒氣あるときは手足耳落ちん計りなり、されど我々は家屋内にある故に寒さを感じざるも、べんとおにて山へ行くときは飯皆氷となる

辰次郎本日來る、毛皮三枚を与へたり、辰次郎より巻煙草百本、ブランドイ酒一本を送り來る、是は大東溝にて仁川より來りし商人より買ひし由、煙草代価三十錢、日本六錢位の品なれど結構々々

支那たばこはからし、支那酒はしょうちう計りなればなり
午後前哨となりて西山へ行く、辰次郎も少哨として鳳凰街道へ行く由申居れり

十二月二日

支那人よりやかん・錫の茶入れを買ふ、價六十錢、矢張り質屋の王元明なり、又李泰源に命じて皮のチヨッキを作らしむ、明日出來の筈

大孤山にては最早支那人にて我紙幣を通用す、又豆腐等は早天より売りに來ると、岫巖にても銀貨取引なれど段々市場繁昌、食品賣りに來る、サツマ芋・ホシタケ・葱・菜・ぶた・鶏・卵・アヒル・大豆・小豆は山の如し、先づ食物には当分安心、兵卒も毛皮又は絹布を纏ひ、全く盜賊の隊長顔にて支那人に料理を言ひ付ける有様なり、金錢は湯水の如く使ふて食ふ事一心なれば、他の有様は御推察下されたし

十二月三日

工兵少尉庄田少尉より質屋の主營人なりとて衣類を買ひに來る、余は質屋王元明を助けしなり、此家の物を買ふに一々我が封印を要するとは厄介の事なり、併し友情世話する筈なり、是れは奥宮大尉へチヨッキ二枚を世話し、

大隊長に毛皮絹類を世話せしよりなり

当地風引き病人多く、ジエキ乃ちチョウチブス流行す、我中隊に三名あり、然れども辰次郎、上月其他我知人には一人もなし、將校にも風引きあり、余は一の病氣なく却て日本に居るときよりは健康にて、却て肥満せし心持せり、日本八百万神の加護によるか、多謝謹拝

辰次郎より傳言、十月 日出の御書状と御機嫌能被為入る事拝承仕候

我聯隊の將校又は其家族死亡のとき、一人に付二十錢(家族は十錢)づゝ義捐金を送る、此金は留守宅より取る事と友岡少佐より申來り同意せり、是で一人に付十円位をもらう事の由、已に家族には相談せられたる筈なり、岫巖北方高地へ十八ヶ所の堡壘を作る、歩兵と砲兵四名にて分捕砲を据へたり

支那人ははだかにて寝ぬ、しらみ沢山

午後辰次郎同行にて質屋に行き衣類(絹)を買ひに行きしに、上等絹布衣四枚と錫の湯壺を辰次郎に奉送し呉れたり、此時酒井少佐・小野寺少佐・大内軍医・渡大尉・柴山中尉・寺町少尉の為に十八円(日本にては百二十三元の品)にて買ふ事を周旋せり、私が通弁人とは面白き事なり、但し主人は我に大明宣徳年製とあるせんとのく

小火鉢を呉れたり、質屋の上々受なり、支那人は銀さへ見ゆれば喜ぶ、今日以後は卵十分に食ふ、三百以上も買ひたり

十二月四日

昨夜より雪降りたり、三四寸も積りたり、今日は却て暖なり、雉子二つがひを買ひたり、我家にある古き衣類と交換したり、此衣類は分捕品、つまり只の品なり

肉類には食ひ飽きたり、豆腐売日々来る、唯今不自由とては一つもない、日本よりの手紙の来る事と新聞を誰か送り呉るるやを待つのみ

十月廿一日秋田山形の大地震名古屋の弱震を知る

第七中隊長牧野留五郎免本職、第一軍司令部附を命ず、大西藤三郎(第六中隊附中尉)任歩兵大尉第七中隊長に補す、柴山勇吉は第二大隊副官となる

呉大尉及辰次郎来る、巻煙草百本辰次郎より受く

今夜九時頃防寒用のフランネルシャツ・メリヤスのズボン下れり、一つも追送品来らず

第五旅団司令部及第十八聯隊も不日岫巖へ来る由

王子香に命じ綿羊皮の絹表のチョッキを作らしむ、價一円二十錢(日本にては少くも六七円の品物)

皇后陛下より寒気の御沙汰ありたり

十二月五日

本日前哨の為に山へ行く、支那人より小かばん一個を買ふ筈なり、皆帰朝のときの土産物

日本出発より今日まで一度も病氣風ひき腹下りなし、大自慢に候、当地熱病流行、私共は丸くなる程着込みたれば毎日毎夜寒さを感じず

津六郎様、斎藤、上村、飯田、岡本、へ宜敷、宇野様、北村様、友岡様、長様、藤林様、島田様、前田珍男子君へも宜敷、又大田の御隠居様にも中村雄二郎様へ御序に宜敷

凡そ手紙(二銭切手)は清国第一軍第三師団第五旅団第六聯隊第一大隊、、、にて、何地に変わり居るも通じ候に付、諸君へ宜敷御傳へ被下度候

十二月五日 午前九時五十分記了る

金藏 (印)

父上様

(未完)